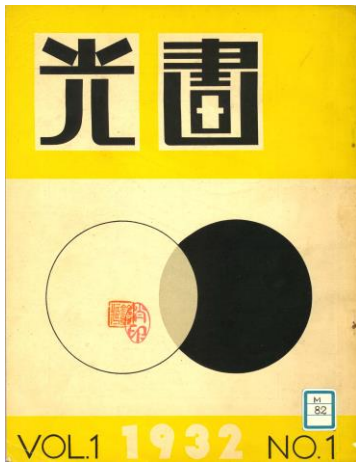


日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

伊奈信男^{いなのぶお} (1898-1978) は、1922年に東京帝国大学文学部美学美術史科を卒業後、同校美術史研究室副手を経て、日本大学専門部、東京高等師範学校、聖心女子学院高等専門学校（現：聖心女子大学）の講師を歴任しました。教職の傍ら、美術評論や雑誌編集に携わっていましたが、1932年、写真雑誌『光画』の創刊号に論文「写真に帰れ」を寄稿したことがきっかけで、同誌の編集に加わり写真評論の道に進みます。1933年には名取洋之助が提唱した日本工房に参加しましたが、内紛で翌年新設された中央工房へ移ります。1935年には外務省文化事業部の嘱託となり、その後内閣情報部などで活動しました。



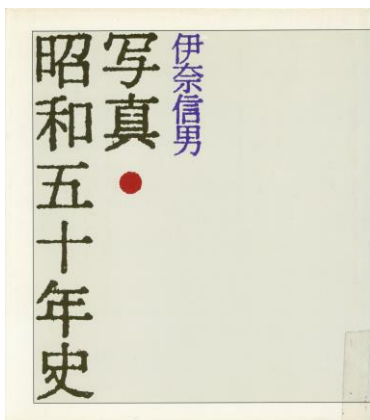
『光画』創刊号

戦後は写真評論活動に専念しました。特に1949年10月の『アサヒカメラ』復刊にあたっては、編集顧問的な立場で携わり、初期には海外作家と作品の紹介を担当しました。その後も座談会形式の記事や、口絵評、内外写真界の動向紹介など多数を寄稿しています。木村伊兵衛とは『光画』の時代から理論面で支える盟友として、40年以上にわたり深い絆で結ばれていました。『日本カメラ』1956年9月号の対談や、『アサヒカメラ』1973年4～6月号の渡辺勉を交えた鼎談などから、その親交ぶりを知ることができます。

1960年代後半に入ると、写真評論の先駆者としての活動が評価され、1966年に紫綬褒章、1970年には勲四等瑞宝章を授与されています。1968年にはニコンサロン名誉館長に就任しました。1976年には日本写真界の発展に対する貢献と業績を記念し、同所で開催された写真展に対する年次賞として「伊奈信男賞」が創設されました。

写真雑誌各誌や写真全集などへの寄稿は多数ありますが、単独著書は1978年に朝日新聞社から『写真昭和五十年史』が刊行されたのみです。本書は『アサヒカメラ』1975年1月号から1977年7月号までの連載をまとめたものです。執筆の動機として伊奈は、『フォトアート』1964年1月号から1968年12月号まで「近代写真の成立と発展」を連載したが、日本に関する部分が少なかったので同連載の続きのようなつもりで書いたと、あとがきに記しています。

「写真に帰れ」については、1988年に飯沢耕太郎が『写真に帰れ『光画』の時代』（平凡社）を著すなど、日本ではじめて美学的に写真の本質とあり方を究明した重要な論文として、今日に至るまでさまざまにとり上げられています。2005年には大島洋の編集による『伊奈信男写真論集 写真に帰れ』（ニコールクラブ）が発行されました。本書は代表的な雑誌記事を集成したほか、詳細な年譜と書誌データが掲載されています。なお、伊奈が集めた書籍などは現在当ライブラリーに収蔵しています。



『写真昭和五十年史』